

扶桑社の

## 「新しい歴史教科書」について

Columbia



〇与謝野晶子

[情熱の歌人晶子] 与謝野晶子(1878~1942)は、歌集『みだれ髪』(1901年)で一躍有名になった。そこには、例えば、「その子二十箇にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな」という歌のように、みずみずしい新鮮な情感が歌い込まれていた。晶子の歌は、明治という時代の、自由な新しい感情表現の試みであり、それまでの形式を脱した新しい短歌の可能性を開いた。そうした歌人としての活動と、与謝野鉄幹とのほげしい恋愛の末の結婚が話題となり、晶子は奔放な女性だというイメージが広がった。

さて、日露戦争のさい、晶子は旅順攻略戦に加わっていた弟のことを思い、「あゝをとうとよ君を泣く 君死にたまふことなかれ」という節で始まる有名な歌を発表した。この歌は当時、愛国心に欠けるとの非難を浴びた。しかし、晶子にとってそうした非難は心外であった。

というのも、晶子は戦争そのものに反対したというより、弟が製菓業をいとなむ自分の実家の跡取りであることから、その身を案じていたのだった。それだけ晶子は家の存続を重く心に留めていた女性であった。実際、晶子は、大正期の平塚らいてうらの婦人運動を当初支持したが、晶子の人生観や思想そのものは、家や家族を重んじる着実なものであった。晶子自身は歌人として活動を続けながら、大家族の主婦として、妻や母としてのつとめを果たし続けた。夫であり、12人の子の父であり、文学上の同志であった鉄幹の死を、晶子は万感の思いを込めて次のように歌った。

筆らかに今三とせほど  
子とせほど二十年ほども  
いまましかば



〇与謝野晶子の歌集『みだれ髪』

新しい歴史教科書をつくる会主導で作られた教科書の採択をめぐり韓国、中国、アジア諸国から批判及び修正要求が出されています。ぼくは「ぼくらの会」ではこの教科書が女性とどうとらえているか、未来に向けて社員の員として平等に生きてゆけるための教科書だろかという気がなるころです。

左記の文はこの教科書p.235 与謝野晶子についてのコラムです



